

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部・2年 深谷 俊

本稿では、主にハイデルベルク大学の学生とのワークショップについて報告する。

1. 英語であるが、もっと勉強したいと思った。今回一緒にワークショップをしたハイ大の学生3人のうち2人は、アイヌ問題と原爆の集団記憶の問題という、日本に関係した発表をしていた。その議論に当事者である私も参加したいと思ったが、発表が聞き取れなかった。全員がセンター試験のリスニングのようなきれいで流暢な発音をするわけではない。その上、議論が白熱してくると、早口になったり、学術用語など難しい単語を使ったりすると議論についていけなくなってしまった。もっと英語を使えるようになっていろいろな人としゃべりたいと思った。

2. 私たちが参加したハイ大の授業は、東アジア学科の学生を中心にイギリス、アメリカ、ドイツ、トルコ、イタリア、韓国、中国、ロシア etc、という transcultural な人々で構成されていた。それゆえ、日本人なら思いつかないような点から意見が出されたり、ニュースなどではわからない各国の事情が具体例として挙げられた。例えば、私たちの班は寿司をテーマにした発表を行ったが、ロシア人の学生がロシアの寿司屋について発言したり、イタリアの女学生がイタリア料理が他国に輸出され違うものになっていると嘆いていた。また、アメリカ人の学生は、授業の後に、アメリカの食文化も寿司と同じ側面があるかもしれないと共感してくれた。自分の発表は理解してもらえるか不安に感じていたが、国籍も背景も違う人でも、一生懸命に伝えれば伝わるのだと感動した。

授業の発表であるが、transcultural studies というだけあって、文化と文化の交わり合う部分に焦点を当てていたように感じた。前述の二つ以外には、神聖ローマ帝国の黒人奴隷の歴史が取り上げられていた。多様な背景をもつ参加者からいろいろなことが学べた。例えば、ドイツに住むトルコ系の女性が、アイヌ問題をマイノリティーというくくりでとらえ、自分の境遇と重ね合わせていた。

3. ハイデルベルク大学はさまざまな背景を持つ人たちと学びあい、いろいろな価値観を知るには最高の環境であった。そのような環境に身を置きたいと願う人には是非おすすめである。

最後にこのような素晴らしい機会を用意して下さった国際交流推進室の皆さん、引率のカム先生、横田さん、橋本さん、ほかの参加者のみんな、推薦状を書いて下さった先生、旅先で出会った人たち…など多くの人に感謝を申し上げて、私の報告書としたい。